

《日本空手道史概観》

笠尾恭二

1. 中国拳法伝来期（1600～1800年頃）

<琉球人は勇猛だった・・・琉球武術前史>

兵書『孫子』の成立は西紀前数百年の古代中国において、すでに戦争の技術と理論が高度に確立していたことを象徴する。

漢の時代、つまり西紀元年前後の時代、戦闘の最も原初的な技術である拳法は「手搏（しゅばく）」とよばれ、王侯などの前で演じられる総合格闘競技「角抵（かくてい）」（＝相撲）とともにかなりその様式を整えていた。

漢の時代はまた国際的な交流が活発で中国人のアジア諸地域への流出が始まったときでもあり、すでに拳法あるいはその他の中国武術が沖縄に伝わっていた可能性を完全に否定することはできない。

琉球武術最古の記録は7世紀の中国史書『隋書』<東夷伝流求国>であろう。

「武器は刀・矛（＝槍）・弓矢・剣であったが、鉄が少なかったので動物の骨角で補った。人々は戦いを好み、勇猛で死を恐れず、傷によく耐えた。戦うときはまず勇者数人が前に出て挑戦し、それから互いに撃射した」

と描かれている。また、

「もし劣勢が明らかとなれば直ちに全軍で退却し、和議を申し入れる。和解した後は戦死した者を収集し、皆で遺体を食った」

と付記されている。

ここから日本本土には「琉球は食人国」として伝わった。しかし、それは勇者を弔い、その生命を受け継ごうとする宗教的な儀式であったろう。

13世紀、日本僧の漂流体験談をまとめた『漂到琉球国記』は図解付きで、

「人々は弓矢・矛などの武器を持ち勇猛で恐ろしげだったが、実際には一行を歓待してくれた」

と伝えている。唐僧鑑真も同様の体験を経て日本に渡来したのであった。

だが、当時の記録はもとより、その後近世に到るまでの沖縄における伝承に拳法らしきものは一切姿を現さない。

沖縄には古来、単に「手」とよばれる徒手空拳の武術が存在したという説もあるが、拳法は近世、琉球国と中国との交流が活発になってから初めてもたらされた、沖縄にとっては新しい武術文化であったろうと私は考える。

ただし、棒術は別である。1670（寛文10）年の治安取り締まりの連絡文書に、

「従前から禁止しているにもかかわらずまだ夜間に『棒・刀』を持って出歩く者がいる。堅く禁ずること」

と書かれている（東恩納寛淳「徒手空拳の大武術」）。平和な時代になっても人々が夜間外出時の護身用として日常的に「棒・刀」を所持していたことの証左である。

古来、小国の分立抗争が長かった割には鉄製の武器が少なかったところから棒類を武器として戦う術、すなわち棒術は沖縄の場合、拳法とは別に案外古くから存在したものと思われる。

<中国拳法の伝来>

拳法が現在の空手に近い形で沖縄に伝来したのは、明国が琉球に武官を派遣するようになってからである。この説は1935（昭和10）年に刊行された船越義珍『空手道教範』所収の東恩納寛淳「徒手空拳の大武術」によって唱えられた（東恩納は沖縄出身の教育家であり沖縄学の研究者であった。船越の上京時には沖縄県学生寮「明正塾」の舎監でもあった。船越が最初、同塾に寄宿し、その講堂を仮の道場として空手の本土普及に踏み出すことができたのも東恩納の協力による）。

琉球が明に進貢するのは1372年からである。1429年尚巴志王は三山を統一して沖縄全島に文治立国の政策をしき、いわゆる第1回の禁武器時代が始まった。

それから約 170 年後の 1600 年ごろから明は琉球に武官を派遣するようになった。日本史年表には「1596 年、秀吉明使引見、和議破れる」とある。明の武臣派遣はこの秀吉の政策に対抗するためだったという。

1609 年琉球は薩摩の属国となり、いわゆる沖縄における第 2 回の禁武器時代が始まった。2 度にわたる禁武器政策は沖縄において空手を発達させる重要な契機となったというのが通説である。

しかし、1500 年代中期から 1600 年代初期にかけて、倭寇（実質的には日・中海寇による私貿易集団）の横行、『武備志』（明代軍事・武術百科全書）の伝来などにより、日本本土にも中国の武術が伝わり、それまで組み討ちを主体とした柔術に中国拳法が導入されたことも忘れてはならないだろう。

例えば、会津藩『日新館志』〈柔術〉によれば、「夢想流捕手入身兵法開祖」岩田氏系譜に、「永禄年間（1558-70）、唐人紀州に來り、関口孫兵衛信房に拳法・手縛の手を伝授す」

とある。関口流柔術開祖として有名な関口柔心が活躍した寛永年間（1624-44）より半世紀以上も前のことである。

会津藩には「明儒五峯」を流祖とする「体挫術」もあった。五峯とは平戸（長崎県）に本拠を構えた史上に有名な中国海寇・王直のことである。種子島鉄砲伝来の立役者でもあった。中国側から見れば海寇だったが、日本側には海商（貿易商）として活躍していた。豪放な性格で若いときから計数に明るく教養もあり筆談が容易だった。そこで「明儒」とよばれたのであろう。「明儒」とはこの場合「明国の君子」という意味である。

『日新館志』によれば、「体挫術」とは武器を持つ相手の隙に乗じて突入し、その「身を挫き骨を折る妙（術）」であった。「柔術にあらざらず捕手にあらざらず。真の奇術（すぐれた術）なり」と記す。明らかに肘技などを多用する短打系拳法の一つである。

また、後述の武官「公相君」が沖縄で拳法を披露したときよりもやや早い享保年間に、徳川吉宗の武術振興策の一環として、清朝の陳采若・沈大成という元武官 2 名が長崎に招かれ 4 年間滞在している（具体的には 1727-31 年）。当時の記録が「騎射・馬医唐人渡來之次第」として国立公文書館に残っている（大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』1984 年）。

この時の世話役のなかに「秋山八郎右衛門」という武士がいた。楊心流柔術には「開祖秋山四郎兵衛は初め長崎で武官に拳法を学んだ」という伝承がある。この秋山が幕府側史実として残る武官世話役・秋山八郎右衛門もしくはその一族であった可能性は十分にある。

嘉納治五郎が明治時代、投げ技を中心として柔道を確立するまでの柔術は、流派によっては当身技を重視したものが少なかった。古い柔術の試合見聞録にも柔術とは名ばかりで中身はまったく突き、蹴りの応酬であったものがある。

すなわち中国拳法は日本本土と琉球どちらにも伝来した。ただ本土では柔術に吸収され早くから同化されたのに対し、琉球ではほぼ原形のまま継承され、これに沖縄人の工夫が加わり琉球拳法（沖縄手）として生成していったのである。

＜武官「公相君」の渡来＞

1762 年土佐に漂着した琉球人の話を書きとめた戸部良熙「大島筆記」に、つぎのような記事がある。

「先年、組合術（原注：『武備志』に載せる拳法のことであろう）の名手として、中国から公相君（原注：こうしゃんきん。これは尊称とのことである）が、弟子多数をつれて渡来した。

その技は左右の手のうち一方で乳のあたりを押さえるように構え、片手だけで技を使い、さてもよく足をきかせる術であった。

身が細く弱々とした人であったが、大力の者が強引に組み付こうとしたところ、即座に倒したこともあった」

これが記録上、中国拳法の琉球伝来を示す最古のものである。公相君が渡来した「先年」とは、この「大島筆記」の 6 年前、1756 年のことであろう。この年 7 月、全魁を正使とする中国の冊封使節団が琉球を訪れ、翌 1757 年 1 月まで滞在している。

冊封使（さくほうし）とは中国が属国の王位継承を認可する使節である。これによって朝貢国となり、事実上の貿易特権が与えられる。使節団は総勢 200 人以上の規模で、半年以上滞在した。この間に新た

な文化・技術が伝播したであろう。端的に言えば、拳法もその一つであったということである。

公相君は従来、人名もしくは官名とされ、現在も広く行なわれているクーシャンクー（松濤館系では「観空」と改称）の型はこの人の伝えたものとされる。もしこれが事実ならば、250年以上も人間のからだによって受け継がれてきた貴重な日中文化交流の遺産ということができよう。

中国史書には山東省出身の「公」という官吏の姓が複数実在する。例えば1921年刊『中国人名辞典』（商務印書館）に採録された公姓の人物は6例で、そのうち5例は明代に属するが、いずれも山東省蒙陰の出身である。

嵩山少林寺の記録『少林寺志』には明代少林武僧の躍動的な訓練風景を詠んだ長詩「少林観僧比試歌」が収録されている。作者は明代の人「公鼎」である。中国正史『明史』によれば、公鼎は1599（万暦27）年進士となり、のち礼部右侍郎となった。「鼎は好学博聞、磊落にして器識あり」と記されている（「鼎」は『明史』では「おおがなえ」＜「鼎」の上部に「乃」がつく＞。詩の大意は拙著『中国武術史大観』1994年刊に紹介した）。

おそらく清代「公相君」も史上にのこる山東公氏の一族後裔であろう。また「相君」とは官職名ではなく沖縄で使われていた一般的な尊称である。つまり「公相君」とは「公という姓の高官」を意味したであろう。山東省は西紀前の古代から拳法が盛んで、跳躍・蹴り技を得意とするいわゆる北派少林系である。

口碑によれば、このころ首里の渡唐役人・佐久川寛賀は直接中国で棒術を修め、帰国後「トーデ（唐手）佐久川」とうたわれたという。渡来武官に教わるだけではなく琉球人自身が、おそらくは公相君渡来を契機として、直接中国に渡って拳棒を学ぶようになったのである。

これ以後の時代になると、武人以外でも中国に渡航する琉球商人のなかに護身の術として拳法を習得する者がいたようだ。しかし、ごく身近な親族以外そのことを知る者はなく、彼らが歴史の表面に現れることはなかった。

2. 沖縄手生成期（1800～1850年頃）

＜初期琉球拳法の系譜＞

船越義珍はその著『空手道教範』の中で中国拳法の伝来系譜について、つぎのように述べている。

「冊封使について渡来した彼の地の武官『アソン』（発音のまま）に師事して拳法を修めた者に那覇の崎山・具志・友寄等があり、『イワー』（発音のまま）について学んだ者には首里の松村、久米の前里・湖城などがある。

また右衛門殿の島袋、九年母屋の比嘉・瀬名波・具志・長浜・新垣・東恩納・桑江などは『ワイシンザン』（発音のまま）に法を問うた者であり、泊の城間・金城・松茂良・親泊・山田・仲里・山里・渡口等は福州安南から漂着した支那人某に教わったこともあるようだ。

豊見城親方は崎山の教えを受けた大家であり、安里は松村の流れを汲んだ名人であり、糸洲は城間の後を継いだ達人であった。そして安里、糸洲の両先生は著者が多年薫陶を受けた恩師である」

ここには武官及び漂着中国人を師として学んだ沖縄各地の伝習者が列挙されている。これらによって初期琉球拳法の主要な系譜がほぼ明らかである。

つまり武官系としてはアソン、イワー、ワイシンザンの3系統があり、これに加えて、武官同様の影響を与えたい福州安南から来た無名中国人の系列があったということである。

＜昭林と昭霊・・・琉球拳法の古流派＞

糸洲安恒は琉球拳法の由来について、いわゆる「糸洲十訓」の冒頭に、

「唐手は儒教や仏教あるいは道教から出たものではない。むかし昭林流、昭霊流という2派が中国から伝来したものであり、それぞれに特長がある」

と書き遺している。

船越によれば、昭林流は俊敏な技法を練るのによく、昭霊流は筋肉骨格を鍛えるのに適しているという。

型で例を挙げれば、ピンアン（「平安」）・クーシャンクー（「観空」）などが昭林系であり、ナイハンチ（「鉄騎」）・セーシャン（「半月」）などが昭霊系であると説明している。人物系譜でいえば、イワーを昭林流とし、アソンとワイシンザンを昭霊流とする。

昭林・昭霊とも実は同じ「少林」（シャオリン）の訛伝であろう。「霊」も中国語では「リン」である。

中国で拳法門派は一般に南派「少林」、北派「少林」に大別される。どちらも「少林」である。これは「拳法はすべてダルマ大師の少林寺に発する」という通俗的な門派観にもとづく。北派は蹴り、跳躍技などを好み、俊敏な技を得意とするものが多く、南派は筋骨鍛錬を重視し、地に足腰を据えて重厚に技を展開する傾向がある。

すなわち糸洲ら沖縄人の記憶に残った「昭林」は北派「少林」であり、「昭霊」は南派「少林」であったと見なすことが可能である。

糸洲がまとめた近代の型「ピンアン（平安）」は、もともと「チャンナン」とよばれた型が元になっているという。これは福州安南（アンナン）が訛（なま）ったものではあるまいか。糸洲は「城間のあとを継いだ達人」であったが、城間は安南の漂着中国人に学んだ一人である。

ピンアン初段（松濤館系「平安 2 段」）は平安の型 5 段のうちでも異彩を放つ独特の型である。とりわけ初動の構えと手技、また復路に現れる連環動作で身をひねるようにして下段を防ぎつつ逆半身から放つ蹴り技などは、どちらかといえば中国的発想であり、かつ武術性を意識した古流系統の発想でもある。

私はこれがチャンナンの型であり、ほぼ原形を伝えたものと想像する。糸洲はこの独立した伝来型をそのまま保存維持するために、難易度が高いにもかかわらず初段の型として冒頭に置いたのではあるまいか。

< 沖縄手の生成 >

イワーに学び安里に伝えた松村とは琉球国最後の武人と讃えられる松村宗昆（宗棍とも書かれる）のことである。剣は薩摩の示現流を学んだという。拳豪ぶりもいくつかの興味深いエピソードとなって今日まで伝わっている。

松村の誕生は 1809 年ごろというから中国武官が派遣されるようになってから 2 世紀のち、公相君の渡来からでもすでに半世紀、拳法は沖縄にかなり土着化していたにちがいない。その基盤の上に新たな系譜が築かれていったということであろう。

松村の活躍した 19 世紀前半に安里、糸洲、東恩納など沖縄手（琉球拳法）を確立した大家が生まれている。彼らの誕生と成長はそのまま中国拳法を母とする沖縄拳法の誕生と独立とを如実に表していた。

拳法の型がそれまでは単なる「闘いの術」を意味するにすぎなかったであろう「手」という言葉に沖縄の地名を付して「那覇手」「首里手」「泊手」などとよばれるようになった、つまり沖縄手に地域的な流派名称が誕生したのも多分このころからであったろう。これらの沖縄手こそ日本空手道の直接の母体となったものである。

この時期を分岐点として近代流と古流とに分かつこともできるであろう。例えば首里手系ではピンアン（平安）が近代流でクーシャンクー（観空）が古流である。那覇手ではサンチン（三戦）が近代流、スーパーリンペー（壱百零八）などが古流である。

3. 沖縄手確立期（1850～1915 年 嘉永 3～大正 4 年）

< 船越義珍と空手の出会い >

日本空手道の確立に大きな役割を果たした船越義珍の生涯は、そのまま沖縄手すなわち琉球拳法の確立とその近代化の歩みであったといっても過言ではない。

船越の回顧録『空手道一路』（1956年）によると、戸籍上は明治3年生まれということになっているが、これは後年になって医学校受験のため戸籍作成が必要になったとき受験資格に合うよう生年をずらせて申請したもので、実際は1868年すなわち明治元年の生まれであったことが知られる。

船越は奇しくも日本近代化の始まりというべき年に誕生したわけである。その生誕は柔道の嘉納治五郎に遅れること8年、合気道の植芝盛平に先立つこと15年であった。

船越が空手を習いはじめたのは11歳のころである。船越は生来虚弱であったが、たまたま小学校の同級生に文武両道の達人として有名な安里安恒の子息がいた。その縁で、初めは健康になればいいという家族の願いから入門したようである。身体が強健になるにつれて空手に対する関心が強まり、船越自ら積極的に学ぶようになったという。

<糸洲安恒と体育空手>

船越は成人後、安里の紹介で糸洲安恒にも師事するようになった。糸洲安恒は安里安恒の友人であり、首里手の大家であった（ふたりとも「安恒」を名とするのは偶然である）。

糸洲は学校体育向けに古流の型から基本技法を集成して5段階からなる一つの型にまとめ「平安」と名付けた。

型の名称は従来、「公相君」のように人名であったり「二十四歩」「五十四歩」など挙動数で表していたが、「平安」という内容的にも深い意味を有する名称を付けたところに糸洲の偉大さがある。それはまた沖縄拳法が中国拳法から名実ともに独立したことを象徴するものでもあった。

既述したように、平安の型初段は古流の型を原形のまま採録した可能性が強い。一方、他の4つの型はPASSAI、クワンサー等古流の型から抜粋簡略化した動作から成り立ち、古流の武術性をあえて捨象し、からだを大きく展開する鍛錬性に重点を置いている。

糸洲は今日「糸洲十訓」（1908<明治41>年記）として知られる小文を遺している。空手修練の要旨を10箇条にまとめたものである。その第10条に、

「唐手を体育の土台として小学校時代から鍛えれば、やがて熟練後には一人よく十人に勝つ者が輩出しよう」

とある。糸洲は、学校体育としては身体の鍛錬性に重点を置き、武術的な訓練は成人後に実施すればよいという明確な考えを持っていたのである。

「糸洲十訓」はもともと「空手教育趣意書」として起草されたものであったろう。これを見ると糸洲が空手の普及にいかに関心をもち、熱意を持っていたかが理解される。安里がほとんど船越1人しか弟子を持たなかったのに対して、糸洲は数多くのすぐれた門下を育成した。

1901（明治34）年、視学官小川銀之介が沖縄を視察した際、糸洲による解説のもとに船越らが型を演武した。これに感銘を受けた小川は空手の長所を文部省に詳細に報告し、体育として活用すべきであると上申した。

これにもとづき同年、首里尋常小学校の体操科に空手が採用された。宮城長順は「唐手道概説」で「これを以て団体的指導の嚆矢となす」と特筆している。

その数年後、1905（明治38）年には沖縄県立第一中学校、男子師範学校等の体育正科として採用された。

ただし、この採用年については各説がある。船越『空手道教範』は「明治34、35年頃、小川視学官の上申後直ちに」とする。宮城長順「唐手道概説」は「明治38年、第一中学、那覇市立商業学校、師範学校に唐手部設置」と記す。また長嶺将真『<史実と伝統を守る>沖縄の空手道』（1975年）は「明治41年師範学校、第一中学校に柔剣道と併用して採り入れられた」と述べている。

いずれにしても明治末期になって、それまでごく狭い範囲で私的に教授されていた空手が学校教育を通じて初めて公然たる存在となった。糸洲ら沖縄空手人たちの尽力がようやく実ったのである。

実地に教師となって活動した人物のうち花城長茂（第一中学）、屋部憲通（師範学校）が特に有名である。この二人が当時、現役指導者としては突出した存在だったのであろう。二人はのちのちまで後進に大きな影響を与えている。

<東恩納と上地の中国渡航>

船越は安里・糸洲両師の紹介によって、「一握りもある立木の皮を両の掌で剥いてしまうほどの使い手喜友名先生、儒者の風格があった那覇手の東恩納先生、常識に秀れていた新垣先生、やはり名人といわれた松村先生（引用注：松村宗昆とは別人）」

などにも教えを受けたことがあるという。これらの人々が糸洲と同時代の沖縄手の大家であった。

なかでも特筆すべきは「儒者の風格があった」という東恩納寛量である。糸洲が首里手の大成者であり、現代空手道の松濤館流の先師であるとするならば、東恩納は那覇手の確立者であり、剛柔流の祖師であった。

東恩納は20歳で福州（中国福建省）に渡り、35歳のとき帰国したという。滞在15年間、彼が何をしていたかは明らかではない。彼が沖縄を出たのは1872（明治5）年ころである。

内地諸藩はすでに前年の廃藩置県によって統合されていたが、琉球国の運命はまだ完全には決まっていなかった。年表には、「明治5年、尚泰を琉球藩王とする」とある。「藩」の名称のもとに「王」の存在を認めていた。つまり琉球はまだ過渡的な半独立体だったのである。

明治維新革命の影響による政治的な激動と東恩納の中国渡航がまったく無関係であったとは思われない。沖縄には鬣を切ったり徴兵されたりするのを拒否しようとする保守的な空気が強かった。だが、清朝が滅亡に向かいつつあった当時の中国にも東恩納にとって安住の地はなかったであろう。

東恩納が沖縄に戻って10年経ったころ、もうひとりの沖縄人がやはり福州に渡り、10数年後に帰国している。上地流の開祖、上地寛文である。

上地が帰国した明治末から大正初期のころ、安里・糸洲・東恩納らは相次いで世を去り、船越義珍は同志とともに全島を巡回、公開演武を続け、糸洲のあとを継ぐ空手家の一人として名をなし、宮城長順は師の東恩納の型に自らの工夫を加えて剛柔流の実体を確立しつつあった。

上地流はしたがって日本空手道の中では最も中国拳法の原形に近い。私は現役時代の1960（昭和35）年、早大空手部沖縄遠征隊（引率：早大OB大島劫<米国松濤館創立者>）の一員として琉球大学をはじめ各流道場を訪問したが、上地道場では2代目を継いだ上地完英氏にお話をうかがい練武法、型などの解説を受けた。

初代上地のもたらした拳法は「パンガイヌーン」と称するものだったとのことである（「半硬軟」と書く。「剛柔一体の拳」を意味するだろう）。

このときの沖縄訪問では各流道場で数々の貴重な見聞を得たが、上地道場の新城師範演武による「中国拳法直伝の型」は、それまで上地流を実見したことがなかったということもあって、ひときわ印象の強いものだった。

その型は動作も体の伸縮がはげしく、猛獣のような動きを見せ、剛強の技を柔軟な体動によって連ねていた。それはわれわれの学ぶ現代空手道とはまったく異質のものであった。

福建省はいわゆる南派少林拳の発源地として有名である。明代嘉靖年間（1522-66）、倭寇討伐に威を振るった勇将戚繼光が各流拳法を軍事訓練に採り入れて以来、南方中国では拳法がますます盛んになり独自の発展を遂げた。

唐以来「少林の棍」として棒術を以て世に聞こえた少林寺の僧兵が「棒の名誉と同じ彼岸に到達せしめん」として拳法修練にいそしんだのも反乱軍鎮圧や倭寇討伐に駆り出されたこともあるこのころからであった。

満州族が全中国を支配した清代になると、各地に反政府活動が起こり、1760年ころから福建、広東など南方中国には秘密結社「天地会」が登場する。彼らは天地会の始祖を少林寺の武僧に求め、自らの拳法を「少林拳」と称していた。

こうした事実から考えると、東恩納と上地はともに南派少林系の結社で同流の拳を学んだと想像されるのである。ちなみに前記沖縄訪問の際、糸満の比嘉世幸道場を訪れたとき、比嘉氏は私たちに、「剛柔流の剛柔とは、術の要訣を表す言葉であり、われわれの流儀は本来『少林拳』というべきである」と語っていた。

サンチンの場合、剛柔流は拳を握り、上地流は掌を開いて行なう。その他呼吸法にも違いがある。剛柔流は10吸って10吐き、上地流は常に若干の余裕を残すとのことだった。これらは剛柔流がそれだけ土着の那覇手と結びつき、上地流はまだ中国拳法の形をそのまま残しているところから生じる差異ではないだろうか。

4. 沖縄手本土伝播期（1916～1929年 大正5～昭和4年）

<講道館における演武交流>

1916（大正5）年、京都武徳殿において船越義珍は沖縄県を代表して空手を演武紹介した。これが本土における空手公開演武の最初であろう。

それから数年後の1922（大正11）年5月、文部省主催第1回運動展覧会に招待され、船越は再び沖縄空手界を代表し、空手の沿革と技法を解説した自作の図表3幅を携えて上京した。

船越の明快な解説と空手特有の豪快な突き、蹴りの演武はおそらく来場の体育・武道関係者に新鮮な関心を巻き起こしたことだろう。

とりわけこの体育展がきっかけとなって講道館の嘉納治五郎と出会ったことが、船越のその後の人生を大きく変えることになった。嘉納は柔道だけではなく日本古来の徒手武術全般に関心が深く、それらを近代的な体育として日本民族の興隆に役立てることを期していた。嘉納は船越を講道館に招いてさらに詳細な空手の演武解説を求めたのだった。

この時船越の助手として型、組手を演じたのは沖縄師範学校で屋部憲通に学んだ儀間真謹である。船越にとっては糸洲系の若い後輩ということになる。儀間は当時、東京商科大学（現・一橋大）の学生だった。

儀間は90歳の長寿を保ち、儀間真謹・藤原稜三編『<対談>近代空手道の歴史を語る』（1986年）に数多くの貴重な証言を遺している。

その回想によれば、講道館では200畳の道場いっぱいには嘉納一門が集まり、嘉納自身が自ら立ち上がって空手の実技を問うこともあった。単なる演武にとどまらず熱気に満ちた交流会となったのである。翌日には新聞紙上のニュースになったという。

これが契機となって、船越は陸軍戸山学校、中等学校体育研究会など10余箇所から演武・指導を要請され、ついに空手の大成と本土普及を決意して水道橋にあった沖縄県の学生寮・明正塾に住み込み、その講堂を仮の道場とした。ここから琉球拳法が日本空手道に成長発展する道が切り開かれたのである。

船越の有名な漢詩「志を述ぶ」を読むと、生涯ひとと争うことのなかった穏和な船越の心にかに強烈な空手道への情熱があったかを知ることができる。

述志	松濤船越義珍
海南神技是空拳	海南の神技、これ空拳
可恨衰微絶正傳	恨むべし衰微して正伝の絶ゆるを
誰作中興大成業	誰かなさん中興大成の業
斯心奮発誓蒼天	この心奮発、蒼天に誓う

<剛柔流の確立と普及>

一方、東恩納に少年時代から師事、自らも中国に渡って研鑽するなど拳法の修行・研究に励んでいた那覇手の宮城長順も1929（昭和4）年ごろ本土に剛柔流をもたらした。

すでに触れたように、宮城の高弟の一人（もともとは東恩納門下の兄弟弟子）だった糸満の比嘉世幸氏によれば、剛柔流の「剛柔」とは空手の本質を一言で説明するために「剛柔の道」という意味で言ったのであり、本来は少林拳と称すべきものであった。

本土で柔・剣術など伝統諸流に交わって演武紹介するためには日本的な流儀名称が必要であるとの門人の実践的な要請にもとづいて、「それでは剛柔流と名乗るがよい」ということになったようである。

宮城本人は単に「唐手」といい、積極的に「剛柔流」と名乗ることは少なかったものと思われる。

これは船越の場合にも当てはまる。船越は終生「空手」といい、自らは流派を名乗らなかった。船越の空手を松濤館流というのはごく近年になって他流と区別するために一般化した呼称である。

もともと沖縄人にとっては修練の優劣が第1義であり、門派や型のちがいは2義的なものでしかなかった。すぐれた人には系派を問わず道を問うという風習があったのである。

宮城はのち米国、中国にと足を伸ばし、行動半径の広さと中国拳法に対する造詣の深さでは日本の空

手家随一の人物であった。

宮城は1929（昭和4）年、京都大学柔道部の招待により短期間指導した（宮城「唐手道概説」では京都大学柔道部が初めて沖縄の空手家を招聘したのは昭和2年とする。ただしそれが宮城本人であったかどうかについては明記していない）。

そのころ京都新撰組屯所跡に道場を開いていた立命館大学の山口剛玄に伝授したのが今日の剛柔流隆盛のもととなった。山口は戦後1948（昭和23）年、東京の浅草に本拠を構え、海外にも広く知られることになる。

山口剛玄以外にも比嘉世幸の門人、泉川寛喜が1938（昭和13）年ころから関東に剛柔流を伝え、主として東京の市川素水とその門下が伝統を受け継いでいる。

<糸東流の影響>

糸東流開祖・摩文仁賢も宮城と同じころから関西方面に活躍している。「糸東流」とは、糸洲と東恩納の頭文字をとったものであり、糸洲・東恩納時代の沖縄手の主要な型をほとんど改変せずを受け継ぐ、歴史的にも貴重な総合流派である。

摩文仁は門派の壁を越えて古伝の型や資料の収集保存に尽力し、その成果を実地教伝と著述活動によって広く公開した。また人的にも宮城・船越らをはじめその門下と分け隔てなく交わり、各流に少なからぬ影響を及ぼした。

例えば、沖縄伝の特異な拳法書『武備誌』は摩文仁の著『十八（セーパイ）の研究』（1934年）によって初めて世に公開されたものである。同書は明代の有名な軍事百科『武備志』とは全く関係のない独立した拳法伝書であり、技法的には南派少林系である。

そこには2人の人物によって攻防の技を説く28枚の図解がある。2人の頭髪は琉球髷か清朝時代の中国式弁髪であり、原書の成立が清代のものであることを示している。

また2人はほとんど毎図異なる技法を展開しているので、28枚の図録によって実質的には50以上の技法が描かれていることになる。往事の格闘感覚をうかがうことのできる拳法史料としても貴重である（近年の研究書として渡嘉敷唯賢『秘伝「武備誌」新釈』1995年刊がある）。

従来、同書は那覇手系の秘伝書として剛柔流の人々によって受け継がれてきたものと考えられていたが、摩文仁の付記によれば、もとは首里手の大家糸洲安恒が秘蔵していたものという。

慶応大学には船越系以外の珍しい型がいくつも保存継承されている。慶大OB望月康彦氏の記録「船越義珍師範」（2005年）によれば、そのなかには摩文仁の伝授によるものが複数あるという。摩文仁が資料だけではなく実技の上でも広く門外に影響を与えていた例とすることができよう。

早大初期OBの直話によると、摩文仁は上京のたび船越一門と親しく交流し、その門下の大学生で演武のすぐれた者には「私の型も学んでみてはどうか」と積極的に声をかけていたのである。

このようにして沖縄手は昭和初期までに関東、関西に伝播したが、本土から沖縄におもむいて学ぶ者も現れた。

例えば、1929（昭和4）年、東大生三木二三郎が私的に沖縄各地の空手家を訪問している。1939（昭和14）年には宇治田省三ら立命館大学空手部の学生4人と同志社大生1名が立命大の学生監督引率のもとに2ヶ月間、宮城長順のもとで研鑽した（立命大空手部40周年記念誌『一撃』1976年）。大学空手部による公的な訪問としてはこれが最初となる。

5. 日本空手道確立期（1930～1945年 昭和5～20年）

<「唐手」呼称の普及>

私はこれまで沖縄の初期空手を「琉球拳法」「沖縄手」として述べてきたが、沖縄において空手が公開されてのち実際には「唐手」と書かれ、沖縄語で「トーディ」とよばれることのほうが多かったようである。例えば、糸洲安恒の遺稿「糸洲十訓」も「唐手」と表記している。

日本空手道最初のテキストは船越義珍が1922（大正11）年11月、画家の小杉放庵にすすめられて発

表した『<琉球拳法>唐手』である。このときは当然、標準語で「カラテ」と読んだであろう。

この書はよく読まれたようであり、同書の普及とともに「<琉球独特の拳法>唐手」が武道・体育界の一部にとどまらず一般的にも広く知られることになったとみてよい。

昭和初期、関東・関西各大学に空手部ができればじめてからも一般に「・・・大学唐手研究会」等の名称で書かれていた。

1936（昭和 11）年、宮城長順は関西における空手の公開講演に際して、剛柔流最初のテキストといふべき一文を著した。一般に「唐手道概説」として知られるが、原題は「琉球拳法唐手道沿革概要」である（長嶺将真『<史実と伝統を守る>沖縄の空手道』所収）。

「柔道」が嘉納治五郎以前にも用語としては存在したように、実は「空手」も明治時代すでに用例がある。空手の訓練体系を解説した花城長茂の一文である。「明治三十八年八月 空手組手 花城長茂」と明記されている。

仲宗根源和編『空手道大観』（1938 年）は巻頭グラビアにその写真を掲載し、「花城長茂先生の墨跡。『空手』の文字を明治 38 年（1905）に使用せられた特筆記念すべき文献」と解説している。

この文献は糸洲が長老として活躍していた時代、屋部憲通とともに実地教授の先頭に立っていた花城がどんな指導体系をもっていたかをうかがわせる重要な資料であり、また確かに「空手」2 文字が出現する最初のものとして特筆すべきである。

しかし、この場合の「空手」は「唐手」に替わる総合名称としてではなく、「徒手空拳による対人練習法」という意味として「空手組手（くうしゅくみて）」と題したものではなかったろうか。

<慶大の「空手」改称>

最初に明確な理念を以て「空手」に改称したのは、慶応大学空手部である。『慶應義塾大学空手部五十年史』（1974 年）に収録されている同部 1929（昭和 4）年度稽古始めの 4 月 15 日付け日記帳に、「今年より断然、『唐手』を『空手』に改む。読み方は同じ」

とあり、その翌年刊行された同部機関誌『拳』誌に「空手」の理念を説いた一文「『空』手について」を掲載している。筆者は当時の現役部員・下川五郎（昭和 7 年卒）である。

同文はまず最初に、中国史書『漢書』にある「空手にして猛獣を搏つ」用例から「空手」とは「手に物を持たないことである」と文字の原義を説く。

ついで空理の大綱は般若心経にあるとしたうえで、宮本武蔵『五輪書』空の巻、沢庵禅師が柳生流に伝えた『不動明智論』（『不動智神妙録』）などを引用して武道的な「空論」を確認している。

沢庵禅師は「心はどこにも置くな。無心であれ」と説き、「心を一方に置けば九方が欠ける。心を一方に置かなければ心は十方に有るぞ」と述べ、これを武術に当てはめれば、「太刀をば打ちつけよ。打ちても心な留めそ。一切打ち手を忘れて打ちて人を斬れ。人に心を置くな。人も空、我も空。打つ手も打つ太刀も空と心得よ。空に心は留められまいぞ」

と教えている。

これら古人の教えを本論として「『空』手について」の一文は、「空手とは素手の武術である。身に寸鉄も帯びぬ赤裸々たる素朴な武術である。されどその本来の面目は深遠極まりない真空妙有の武道である」

と結論づけ、最後に筆者の「親友蜷川」氏が「一体和尚」と交わしたつぎのような問答歌を付記し、「空手の心」を表す一端としている。

何をがな参らせたくは思へども
空手道には一物も無し

一物も無きを賜はる心こそ
本来空の妙味なりけり

この一文を主旨として、慶大の「唐手研究会」は 1930（昭和 5）年「空手研究会」に改称された。団体名称を改めるにあたっては当然、師範の船越義珍、部長粕谷真洋教授の了解を得ていたであろう。粕谷教授は東京における船越最初期の門人であり、大正 14 年すでに 2 段だったが、部長である教員が認

めれば実質的には大学側の承認となる。

1929（昭和 4）年度の稽古始めには学生たちの自主的な改称であった「空手」が 1930（昭和 5）年には公式の名称になったということである。慶応大学におけるこの時の改称は、「空手」が「唐手」から脱皮し日本武道として成立したことを示す一つの象徴的なできごとであった。

<船越空手の技術的変貌>

当時、船越の空手は技術的にも大きな変化を遂げていた。粕谷教授が 1932（昭和 7）年に自ら撮影製作した慶大空手部の記録映画を見ると、船越自身の演じる型は手足を大きく展開する、中国的に言えば「大架式」演武に変化している。船越最初の著『<琉球拳法>唐手』に描かれた「小架式」技法に比較して、その変貌は明らかである（沖縄唐手は門派を問わず小架式が基調であった）。

架式（もしくは「架子<かし>」）とは、技法・体動の形式をいう。一般に北派少林系には大架式が多く、南派少林系には小架式が多い。もっとも「架式」はやや北方的な表現であり、南派少林では「長橋大馬、短橋狭馬」といって区別する。「橋」は腕、「馬」は立ち足を意味する。

大・小は相対的な問題であり、絶対的な基準はない。また武術的にはそれぞれに特色がある。同一門派内で大・小架式を相互に補完し合うものにとらえる立場もあろう。架式の大・小を対立的にとらえ、軽々しく型や門派の優劣を論ずべきではない。

ただ、技法や型の原形が本来どちらの体動を前提に作られたものかを無視すると型の原義が十分には体得されないであろう。例えば松濤館系の型でいえば、観空（クーシャンクー）は長橋大馬の型であり大架式に演じるのがふさわしく、鉄騎（ナイハンチ）は明らかに本来は短橋狭馬の型であり、小架式に演練して初めて原義が体現されるものと私は考える。

<船越『空手道教範』の意義>

1935（昭和 10）年、船越義珍はそれまでの教本とは面目を一新する『空手道教範』を公刊した。

同書は「空」字の意義を明確にし、型の名称をすべて和名に定めている。5 段からなる平安の型も難易度によって初段と 2 段を入れ替えた。

練習体系としては型演武から組手及びその変化技（2 段変化、3 段変化）へと進み、さらには居合、投げ技、対武器法、女子護身術への応用にいたる。船越が当時、日本空手道と称するにふさわしい総合的な技術体系を編み出したことが、同書の写真解説によって一目瞭然である。一言でまとめれば大架式の体動を基調とし、単独の型演武修練にとどまらず組手すなわち対人技法とその練習法を重視したところに大きな特色がある。

私の見るところ、この書の刊行された 1935（昭和 10）年をピークとする前後合わせて 10 年間は日本空手道の確立期であり、戦前における空手道の最盛期であった。

船越が本土に空手を伝えはじめたとき、年齢的にはすでに 50 歳を越えていた。沖縄で長年にわたる学校教員としての社会人生活から身を転じて、第 2 の人生として日本空手道の確立と普及に尽くしたのである。

『空手道教範』を発表した 1935（昭和 10）年といえば船越は 70 歳に近い。修練数十年、船越は技心ともに相当の域に達していたであろう。この円熟した教育武道家船越と行動的な知識階級であり、かつ修行の時間を十分に持っていた学生を中心とする青年層との結びつきが日本空手道成立の大きな要因となったのである。

<大学空手部の起こり>

主要大学における初期の普及状況を見ると、まず 1924（大正 13）年、慶応大学唐手研究会が結成された。これが大学空手部の最初である。ついで 1926（大正 15）年、東大に唐手研究会が結成されている。

東洋大学空手部創立も 1927（昭和 2）年というからこれも古い。初代師範は本部朝基であった（同大はのちに摩文仁賢和に指導を仰ぎ糸東流系となる）。本部は昭和 5 年ころ早大有志にも教えていたが、空手部創立にはつながらなかった。

本部は本土を訪れた初期の沖縄空手家のなかでも「実戦派」とうたわれ、交流した人々に強烈な印象を残し、その威名は今に伝わっている。

遺されたナイハンチの演武写真や著述『＜沖縄拳法＞唐手術（組手編）』（1926年）を見ると、型の演武にもすぐれ、また琉球唐手について豊かな見聞を持っていたことがうかがわれる。しかし、終始個人的な活躍にとどまり、自己の団体を組織化するには至らなかった。

東大空手部は1929（昭和4）年ごろにはすでに自主的な研究が活発だった。既述のように部員三木二三郎は夏期休暇を利用して沖縄を訪問、宮城長順をはじめ当時の代表的な空手家に会っている。棒術を含め各種の型を学び、帰京後、高田瑞穂と『拳法概説』（1930年）を著した。

そのグラビアには日本最初の防具付き組手の写真があり、試合化の研究も活発であったことが知られる。一説によれば、船越義珍はこの傾向を嫌い、東大から足を遠のけるにいたったといわれる。

船越は組手訓練も重視するようになっていたが、それはあくまでも補助的なものであって稽古の主体は型の反復修練に置いていた。船越にとって組手は攻防の基本技に習熟し、型の理解を深める補助的なものであった。実戦的な心得については上級者に対して個別に語るのみであったという。

武道を生涯の心身修養法と考える船越にとっては武徳の涵養が第一義であり、試合場の一時的な優劣で序列を競い合うことは、かえって空手修行を乱す恐れがあると考えていた。そのため終生、組手主体の稽古体系や空手の競技化には消極的だったのである。

『拳法概説』の出版された1930（昭和5）年、拓大生高木正朝のよびかけにより拓大空手部が同好会形式で発足した。当初、慶応の小幡功（慶大空手部初代幹事）が指導した。

高木は1929（昭和4）年、同郷の早大第一高等学院生・野口宏の求めに応じ、明正塾に伴ない船越義珍に引き合わせている。野口は1931（昭和6）年早大高等学院に空手研究会をつくり、1933（昭和8）年、学部に進学すると同時に早大空手部を結成した。のち野口は1934（昭和9）年、法政大学空手部結成後、その指導におもむく。

船越が儀間真謹を通じて縁の深かった東京商科大学（一橋大）の空手部創立は1931（昭和6）年である。

一方、関西方面では立命館大学に剛柔流、関西大学などに糸東流が広まりはじめた。

宮城は「唐手道概説」で関西大学は1930（昭和5）年、立命館大学空手部（当初「唐手拳法部」）の正式創立は1935（昭和10）年として紹介している。

山口剛玄『剛柔の息吹』（1966年）によれば、山口ら学生の自主的な活動は1930（昭和5）年すでに大学当局に認められ、1931（昭和6）年からは沖縄出身の学友・与儀実栄の紹介で宮城に師事した。宮城は沖縄から隔月で出張教授していたという。

同好会形式であれ、学生らの実質的な組織活動を基準に考えれば、立命大空手部の起源も1930（昭和5）年にさかのぼることになる。最初の大学空手部である慶応大学の場合も1924（大正13）年に発足したが、大学体育会に正式に加盟できたのは1932（昭和7）年になってからである。宮城は自ら師範として関わり、創立経過をよく知っていただけに厳密な言い方になったものと推察する。

学生たちの情熱と研究心によって空手の技はかつてなく豪快になり、一本組手、五本組手あるいは自由組手などの相對練習、集団訓練が著しく発達した。

当時まだ試合制度はなかったが、同門同士の間では交換稽古を行なったり、演武会に相互招待するなど大学生間の交流も次第に活発となった。

1941（昭和16）年には明治大学の呼びかけで関東、関西の主要校が同大に結集し、各流合同の画期的な演武大会を挙行している。関東を基盤とする和道流、松濤館流の主要校はもとより、剛柔流では立命館大・同志社大、糸東流では関西大・関西学院大などが参加、4大流派がすべてそろった。まもなく戦時体制に入ったため全国的な組織を成立させるには到らなかったが、空手界の統一気運を盛り上げる先駆的な交流大会であった。

<伝統武術家たちの活躍>

日本武道としての新たな理念・技法の体系化にあたっては、本土における伝統武術家たちの参加、支援も学生たちの情熱的な活動以上に重要であった。嘉納治五郎の積極的な支援は別格として、例えば小西康裕、大塚博紀らは自ら空手を学び、それぞれ新たな流儀を開き、日本空手道の創造的発展に寄与し

た。

小西康裕は当時すでに柔・剣道場を構えていた。剣道は慶大剣道部の主将を務め、のちには同大師範となるほどの腕だった。柔術は竹内流を学び、琉球伝来の新たな徒手武術として空手に関心が強く、船越義珍・摩文仁賢和・本部朝基らと交流し、彼らの活動を積極的に支援した。小西はのちに自ら神道自然流を創始する。

また、大塚博紀は神道揚心流の伝統を受け継ぐ柔術家であった。船越が東京に腰を据えた当初から師事し、本格的に空手修行に打ち込んだ。のちに自立して和道流を開き、1934（昭和9）年には神楽坂に整骨院併設の道場を開いていた。

和道流はここから立教大・東大・明大・日大・東農大など大学生間に広まり、松濤館流・剛柔流・糸東流と並んで本土における空手4大流派の一つにまで成長したのである。

小西・大塚のほか船越に師事した古流武術家として下田武、清水万象も有名である。

下田武は馬庭念流を学び、忍術も研究していた。船越に師事して数年で師範代になり、突出した存在であるところから船越門下の「一本杉」とよばれていたという。後継者の筆頭として目されていたが30代半ばで病没した。

清水万象は富山の古武術家である。柔術は四心多久間流であったという。船越義珍は清水の古武術を高く評価し、「居合い、杖術などの演武を見ると自然に引き込まれる」と語っていた。船越義豪もまた「やわらかい流れの動きの中に殺気のようなものが漂っている」と述べていた（松濤会『松濤館六十年のあゆみ』1998年）。

これら船越の門下に列した伝統武術家たちは単なる門人ではなかった。船越は彼らに大きな逆影響を受け、切磋琢磨のなかで自らの琉球唐手を日本空手道に大成させていったのである。

<沖縄空手界の団結と仲宗根源和>

本土空手界の活発な空気に触発されて沖縄空手界の人々は1936（昭和11）年一同に会し、「空手」の名称採用、沖縄空手道振興協会の設立などを討議した。これには屋割憲通、喜屋武朝徳、知花朝信、宮城長順など当時の代表的空手家はすべて出席している。

1938（昭和13）年には、仲宗根源和編によって、まれに見る総合的な空手専門書『空手道大観』が刊行された。城間真繁の基本技解説、摩文仁賢和の壮鎮、大塚博紀の短刀捕り、花城長茂の慈恩、知花朝信の抜砦（抜塞）、平信賢の周氏棍などを図解で載せ、最後に統一普及型として沖縄空手道振興協会が制定した基本型12段が解説されている。船越義珍の「松濤二十訓」も同書によって初めて世に知られたものである。

巻頭には主要部分の写真が多数収録されている。長老の花城による慈恩、和道流大塚の短刀捕りなどは特に貴重である。また、慶大昇段式、早大団体演武、拓大寒稽古などの写真もあり、大学空手部の若々しい息吹が伝わってくる。同書は1991年、沖縄の緑林堂書店（現・榕樹書林）によって完全復刻版が発刊されている。

編者の仲宗根源和は進歩的な政治活動家として組織力があり、文筆にすぐれていた。東京と沖縄で活躍し、空手の普及発展にも大きく貢献した人物である。空手家として自ら道場を構えることはなかったが、それだけに視野広く行動的な空手研究家であり、また沖縄の生んだ偉大な空手ジャーナリストでもあったといえよう。

<宮城長順と精武会の交流>

船越義珍が東京に腰を据えて大学空手部を拠点に空手の近代化にいそしんでいたころ、宮城長順は沖縄を基点として海外に足を伸ばし国際的に活動していた。

宮城は1934（昭和9）年、ハワイ洋国時報社の招待により半年間指導におもむき、また1936（昭和11）年には中国の精武体育会と交流している。

精武体育会は清朝の命脈がまさに絶え中国革命の近代史が始まろうとしていた1910（宣統2・日本明治43）年、中国武術の近代化と新たな民族体育としての普及発展を目指して青年有志の手によって上海に設立された。その組織的活動は中国南方から華僑を通じて東南アジアにまで波及した。政治の激動を乗り越えて今日まで組織が存続している希有の民間武術組織である。

この時の世話人の一人、安仁屋正昌は沖縄出身の実業家だった。沖縄在住の茶商で白鶴拳の達人でもあった呉賢貴に少年時代から師事し、日中の拳法交流には理解が深かった。同家には今も交流記念の色紙が遺されている。そこには会席者による署名の寄せ書きとともに中央に大きく、

「深願以拳術謀中日親善」

(深く願う、拳術を以て中日親善を謀らんことを)

と書かれている。

日中両国が敵対的な緊張を深めつつあったこの時代に「唐手」の源流を忘れず、積極的に中国武術界と友好的な交流関係を築こうとした宮城長順の見識と活動は歴史的に貴重なものであった。

<松濤館の創立>

1939(昭和14)年、船越義豪を中心とする船越一門の手によって東京の目白に60坪の本格的な空手道場「松濤館」が建設された。

創立年については昭和13年説がある。松濤会『松濤館六十年のあゆみ』(1998年)によれば、落成式は昭和14年1月29日という。松濤館道場の初期門人であり作家として有名な戸川幸夫も伝記小説『船越父子』(1956年刊『武豪列伝』所収)のなかで同じ日付を明記している。おそらく建物は実質的に昭和13年内にできあがり、式典の準備期間を経て年初1月末の正式開館となったものであろう。

糸東流の摩文仁賢和はすでに1934(昭和9)年ごろ大阪に「養秀館」を設立していたという。本土における早期の空手道場として意義深い、施設としてどの程度本格的であったかは不明である。

空手は室内外、また場所の広狭を選ばずどこでも練習できるので、このころまで施設としての専門的な道場は存在しなかった。明治時代、沖縄で学校教育に採用されたときも主に校庭など屋外で演習されていたのである(中国拳法も伝統的には屋外練習が普通である)。

松濤館の中心は船越の三男義豪であった。義豪は蹴り技にすぐれ、また騎馬立ちから工夫した独特の不動立ちによる逆突きを得意とした。実戦的な気迫のこもった組手練習を好み、早大・拓大・中央大の学生らに大きな影響を与えた。執拗に勝負を望む道場破りのような来訪者に対して、義豪が直接立ち会い決着をつけたこともあるという。

船越義珍『空手入門』、広西元信『目で見える空手入門』などに義豪の豪快な騎馬立ち、型、一本組手、棒術などの写真が載っている。彼はまた文部省体育医事研究所のレントゲン技師として空手の鍛錬や攻防の技法が骨格に及ぼす影響を科学的に研究していた。その一端は前掲『船越父子』に描かれている。

義豪は終戦の年1945(昭和20)年11月に病没した。その2年ほど前から肺を病み、体調を崩していたようである。一説に、X線の影響が彼の寿命を縮めたともいわれる。終戦前後の医薬品や食料など物資欠乏も病勢を悪化させたのではあるまいか。

松濤館系の技法は義豪時代、かなり急速に変化、発達したといえよう。義豪のもとで松濤館の指導に当たっていた広西元信(早大OB)は戦後、専修大学で長く指導した。船越義珍の遺風を墨守して、競技団体に参加していないため目立たない存在ではあるが、専修大学の空手には今でも松濤館道場の晩期、義豪時代の豪快な拳風が受け継がれている。フランスで長く活躍した加瀬泰治は戦前の少年時代から松濤館道場で学び、戦後専修大学空手部を創立した初代主将である。

6. 日本空手道再興期 (1945~1949年 昭和20~24年)

<ジェントルマンズ・スポーツとしての復活>

第2次世界大戦において国力以上の無謀な戦いに挑んだ日本は科学物量戦によって米国に徹底的に叩かれた。空手のふる里沖縄は米軍の手によって完全に破壊され、長崎・広島と並ぶ日本民族悲劇の地となった。東京もそれに劣らぬ大きな戦火にさらされ、松濤館道場は誕生後わずか6年にして完全消滅したのだった。

日本の無条件降伏後、米軍は日本全土を占領、武術に関してはチャンバラ映画(通俗的な時代劇)ま

で禁止するほどであったから「軍国主義に加担した」とみなされた武道練習を直ちに再開することは不可能であった。

だが、沖縄出身の大浜信泉早大教授はGHQ（日本占領の連合軍＜実質的に米軍＞総司令部）、文部省に対し、「空手は決して好戦的な武術ではない。徒手空拳による君子の武道である」として大学スポーツとしての存続と練習再開を強く主張した。

一説によれば、GHQ の理解は比較的容易であったが、かえって文部省が強固な自主規制の姿勢を示し、空手の公開練習に消極的だったという。しかし間もなく文部省も大浜教授の主張を受け入れた。1946（昭和 21）年春、早大空手部は全国に先駆けて正規稽古を再開している。

沖縄出身の大浜教授は早くから空手の普及発展に理解が深く、早大空手部創立以来の部長を務めていた。のち全日本学生空手道連盟や全日本空手道連盟の初代会長に就任、生涯にわたって空手の健全な発達に尽力した。

<海外普及の初め>

1947（昭和 22）年、世界的に有名な米国の写真雑誌『ライフ』は数ページの特集によって「空手はジェントルマンズ・スポーツ」であると報道した。同誌には早大空手部による荒々しいほど勇壮な稽古風景が紹介されている。まだ戦後間もない当時の大学空手部の雰囲気をつかかわせる、今では貴重な史料である。

米軍自体は柔道・空手など日本の徒手武術に対して占領当初から強い関心を持ち、導入に積極的だった。

社会的にも落ち着いてきた 1952（昭和 27）年、SAC（米国戦略爆撃隊司令部）は講道館を介して米空軍格闘術教官・憲兵（軍事警察官）らに対する柔道・合気道・空手道の日本特訓を開始した。空手部門の主席指導員には小幡功（慶応 OB）が就任した。

そして翌 1953（昭和 28）年、SAC 司令官ルメイ大将の招聘により、空手部門では小幡功・鎌田俊夫（早大 OB）・西山英峻（拓大 OB）の 3 人が 100 日間にわたって全米基地を巡回して空手の紹介、指導を行なった。これが米国のみならず海外における公的な空手指導の最初である。

これよりのち外国人の日本滞在中における自主的な学習あるいは欧米に留学した大学空手部出身者による指導、さらには会派による組織的な指導員派遣などによって空手は海外で重層的に展開し、一挙に普及していくことになる。

<船越の帰京と日本空手協会>

1947（昭和 22）年の秋、疎開地九州より帰京した船越義珍を迎えて、早大道場において歓迎演武会が開催された。たまたま東京の大学と交流するために上京していた同志社大学（剛柔流）・近畿大学（糸東流）もこれに参加、船越門下各大学生はもちろん和道流も加わり、各流合同の画期的な演武会となった。それはまた学生連盟、各派全国組織を生み出す一つの契機ともなったのである。

1949（昭和 24）年、松濤館系大学 OB は日本空手協会を結成した。現在の日本空手協会はこの組織をもとに 1955（昭和 30）年、新たに再編成したものである。1958（昭和 33）年には空手界唯一の社団法人となった。再編後、大学空手部としては駒沢大・大正大・亜細亜大・青山学院大・防衛大などが協会系の主要校として急速に成長していく。

（社）日本空手協会は拓大 OB 中山正敏が中心となって合理的な訓練体系を確立し、金沢弘和（拓大）・浅井哲彦（拓大）・三上孝之（法政大）・白井寛（駒澤大）等々、若くして技術レベルの高い指導員を多数育成した。中核になったのは拓大空手部の若手 OB たちである。

彼らの活躍によって協会は国内はもとより海外にも比較的短期間に飛躍的發展を遂げ、「世界最高の空手専門家集団」と国際的に高く評価されるまでになった。空手を世界的に普及させるに当たって初期の（社）日本空手協会が組織的に果たした役割はきわめて大きい。

7. スポーツ空手道普及期（1950～1963 年 昭和 25～38 年）

<全国的な試合大会>

1950（昭和 25）年、全日本学生空手道連盟が結成され、学生間に流派対抗の自由組手による交歓試合などが活発に行なわれた。

しかし、当時の交歓稽古は対抗意識が強すぎてかなり野蛮なところがあり、時にはスポーツ精神に反するようなこともあった。

1957（昭和 32）年、初めてスポーツとしての競技法則にのっとることを目指して第 1 回全日本学生空手道選手権大会が開かれた。参加校 56 校。明治大学が慶応大学と接戦の末、優勝の栄冠を勝ち取った。

翌年には全日本学生個人選手権も開催され、立命館大学・三本同が優勝した。この年は団体戦の全国大会でも初参加の立命館大学が優勝している。

以後、競技大会の気運が盛り上がった。それでもまだ、敗北が確定したチームの大將が故意に相手に突き蹴りを当ててケガをさせるような場面もあり、競技大会全体としてはやはり問題があった。

試合化以前の問題として、日常の部活動でも訓練の行き過ぎで死傷者を出すような大問題を引き起こすことがあった。文部省は大学空手部の体質を憂慮し全国的な実情調査を行なうとともに、学生空手道の健全な育成をうながすべく関係者に働きかけた。

この文部省の指導的斡旋により 1963（昭和 38）年、学生連盟は大浜信泉を会長に迎えて再発足することになったのである。

競技上の問題については、流派を超えて大学 OB らが自主的に協力し、実験的な練習会を積み重ね、審判制度の確立と普及に尽力した。

学生の全日本大会が開かれた 1957（昭和 32）年、日本空手協会が独自の全日本選手権大会を開き、各会派全国大会の先駆けとなった。

この年はまた船越義珍が 89 年にわたる生涯を閉じた年でもあった。船越はそのわずか 3 年前、東京都体育館で開催された日本総合武道大会において高齢の身ながら模範演武を公開しており、「空手の修行は一生である」（松濤二十訓）という自らの主張を実践したのであった。

<防具付き空手競技>

学生空手界あるいは各流の全国大会における試合方式はいわゆる自由組手方式であり、打突を目標寸前において制禦し、その有効か否かは 1 人の主審と 4 人の副審にゆだねるのが現状である。しかし、競技として勝負の判定は実際に打突する方式が最も簡単明瞭である。

既述のように東大生三木二三郎らは 1929（昭和 4）年ごろ早くも防具を考案している。1938（昭和 13）年刊の摩文仁賢和・仲宗根源和共著『攻防拳法空手道入門』には三木と同様の防具を着用している摩文仁の写真が掲載されている。

また、宮城長順「唐手道概説」（1936 年）にもつぎのような一節がある。

「なお将来に於ては多年の懸案たる防具の完成を期し、他の武術と同一程度に試合し得る途を拓き、由て以て一般日本武道精神に合流せしめん事を吾人は痛切に感ずるものなり」

戦前期の防具付き空手は空手界におけるごく一部の試行に終わった。しかし、のちにこの流れから沢山宗海による新たな防具付き組手主体の徒手武道「日本拳法」が誕生したのは大局的に見れば大きな結実であった。

戦後、韓武館（館長尹儀柄）はいちはやく「防具付き空手で国際オリンピック！」を旗じるしに従来の空手界とは別に独自の組織活動を展開した。

1954（昭和 29）年、韓武館の流れを汲む錬武会（会長蔡長庚）が第 1 回の防具付き空手選手権大会を開いている。規模はそれほど大きくはなかったが、学生連盟や日本空手協会の全国大会に先立つ先駆的な空手競技大会であった。

熊本の千歳強直、佐賀の米山寛、鹿児島島の保勇らも防具を採用、1957（昭和 32）年ごろから九州空手道選手権大会を始めている。彼らは体重制三本勝負方式を採用した。

大学関係では、埼玉大学空手部 OB 高橋洋一（南郷継正）らが独自の防具付き試合方式を採用、1960

(昭和 35) 年、埼玉大・山梨大・千葉大・宇都宮大・茨城大・群馬大・新潟大などによる第 1 回関東甲信越防具付き空手道優勝大会を開いた。大学空手部による防具付き空手競技大会の初めとして意義があろう。

彼らの方式は身長・体重をともに考慮した 2 階級制である。勝負はポイント方式、すなわち一定試合時間内に多数のポイントを取得した側を勝ちとする方式である。

自由組手は文字通り体動、技法が自由であり、木刀試合に等しい真剣味がある。その意味で訓練法としてはすぐれている。しかし、競技法としては高度の熟練度と相互の信頼感が必須である。同門同士の上級者ならば試合として成り立つが競技として一般化するには難点がある。

これに比較して防具付き空手にはスポーツ競技方式として明らかに利点が多い。また標的に実際に当てて勝負を決する点では実戦的な武術性がある。防具そのものがまだまだ開発途上にあり、安全性、経済性など競技普及に当たっては大きな課題を抱えているのも事実ではあるが、防具付き空手は空手競技化の一つの道として今後も着実な歩みを続けるであろう。

8. 日本空手道発展期 (1964~1970 昭和 39~45)

<全空連による統一全国大会>

1963 (昭和 38) 年再発足した学生連盟を母体として 1964 (昭和 39) 年、全日本空手道連盟が結成された。初代会長には大浜信泉が就任し、一般武道・スポーツと同様、全国にまたがる統一的で健全な競技団体となるよう組織的な整備に力を尽くした。

しかし、流派を越えて全国的な競技大会を開いたのはやはり学生空手界のみであり、依然として各会派によるいくつもの「全国大会」が存在した。

1969 (昭和 44) 年、モーターボート競走会連合会からの「スポーツ振興基金」1 億円をもとに全日本空手道連盟が財団法人となり、笹川良一が第 2 代会長に就任した。このころから空手界はようやく会派を超えて統一的な競技大会開催を目指すようになった。

同年 6 月、第 1 回東京都空手道選手権大会が都の体育祭初参加という意義ある形で開催された。

同年 10 月には、統一的な全国大会を目指して、全空連主催・日本武道館共催・文部省後援による「第 1 回全日本空手道選手権大会」が開催された。

全空連を構成する 9 会派と各都道府県代表により流派・団体名・段位を明示せず、無防具自由組手方式によって行なわれた。

<第 1 回世界大会>

そして 1970 (昭和 45) 年 10 月、全空連の主導により日本で「第 1 回世界空手道選手権大会」が開催された。

東京において団体戦、大阪において個人戦が行なわれた。10 日の団体戦には 19 国 26 チームが参加した。国数とチーム数が一致しないのは日米両国が複数チームを出場させたからである。優勝は日本 E チーム。

11 日、各国代表は「世界空手道連合」の結成を協議、名称及び第 2 回開催の件 (1972 年パリ) などを決議、つぎのような宣言を採択した。

「世界空手道連合宣言

われら空手道の正しい世界的発展を志すもの一同は人類の平和と進歩のために空手道を活用し、すぐれたる精神と、すぐれたる肉体の融合を目標として、われらの努力を結集することに決定した。

よってわれら一同は、それぞれの所属する組織を代表し、この宣言に同意したので、ここに世界空手道連合 (WUKO) という国際機構をもうけるものである」(日・英文)

承認国はつぎの 33 国・地域であった。

アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブルネイ、カナダ、チリ、中華民国、フ

ランス、フィンランド、ドイツ、イギリス、グアテマラ、香港、インドネシア、イスラエル、日本、大韓民国、レバノン、マレーシア、メキシコ、ニュージーランド、フィリピン、セネガル、シンガポール、南アフリカ、スウェーデン、シリア、タイ、トリニダード・トバゴ、アラブ連合、アメリカ合衆国、ユーゴスラビア（ABC 順）

13日、大阪における個人戦には、28国48名が参加、慶大生和田光二が優勝した。

<世界大会が突きつけた課題>

この世界大会をどのように評価、総括するかは各自の空手観によって大きく異なるだろう。最大の意義は、世界各国の指導者・選手が一堂に会し、初めて大規模な国際大会を開催することができたというところにある。

しかし、提起された問題点も大きかった。一傍観者の感想として述べさせていただくならば、少なくとも競技として見た場合、「空手はまだ未完成のスポーツである」ということを実感した。

ある欧州人スポーツ記者がその後の競技会を観戦したとき、「空手競技はボールを蹴らないサッカーのようなものだ」と評した。標的に当てないでその得点を競うというのは、スポーツ競技として根本的な問題である。

日本空手道はいかにあるべきか、どのように発展させるべきか。例えば、伝統武道としての空手と新しいスポーツとしての空手をどのように両立させるか、あるいは競技としていかに身体の安全を確保しつつ勝負の判定を明確にさせるかなど、第1回世界大会はわれわれ空手道を学ぶ者に最も根本的な課題を突きつけたのである。（完）

《改稿後記》：

この小論の原文は「日本空手道史」として1972（昭和47）年8回にわたって「新空手道新聞」（小倉庸義氏発刊）に連載したものです。今回、基本構成はもとのまま各項目にわたって筆を加え、「日本空手道史概観」と改題しました。

客観的な叙述を目指しながらも偉大な先人や諸先輩を敬称もなしに俎上に載せて論じる結果となり、内心忸怩たるところがあります。また、思わざる記憶違い、資料の読み違いなどがあるかもしれません。主要な参考文献はすべて文中に明記しましたが、その他つぎの2書も参照しました。

*宮城篤正『空手の歴史』（ひるぎ社1987年）

*高宮城繁・新里勝彦・仲本政博『沖縄空手古武道事典』（柏書房2008年）

前者は新書版で読みやすく資料性も高い良書。後者は最新成果を盛り込んだ初の本格的な空手総合事典です。

現役諸君が空手史の大綱をつかむうえでこの小論が少しでもお役に立てば幸いです。今後、ご高覧の皆様から積極的なご批判をいただき、より良いものに修正していきたいと念じています。

今回の寄稿に当たっては稲門空手会・倉田和育氏（法・昭和46卒）の熱意あるおすすめで終始温かい励ましをいただきました。記して感謝の意を表します。

2009年4月27日